

# 田舎暮らしを楽しむ

(3)

佐藤 彰啓



一人暮らしに挑戦する林さんの家の前には家庭菜園が広がる(山梨県小淵沢町)

田舎暮らしの夢は、必ずしも妻と行動を共にしななければかなえられぬものでもない。

神奈川県茅ヶ崎市から東京の大手広告代理店に勤めていた林郁夫さん(63)もそうだった。

定年の五、六年前、田舎暮らしの夢を妻の靖子さん(59)に語った。「私は田舎に行きたくない」と、にべもなく断られた。何度か話し合う中で、「私は行かないけど、あなたが行くのは構わない」との同意を得て林さんの作戦が始まった。

その作戦を「JJP」と名づけた。「自立」のための自立プラン

## 夫は高原、妻は都会で生活

### 家族の同意(下)

ロジエクト」。これまで家庭のことは妻任せ。料理、洗濯、掃除すべてダメ。自由を獲得するには自立しなければならぬ。生活実用本を読んだり、料理のレシピをひそかに集めたりした。

田舎暮らしのための資金計画も立てた。土地代一千万円、住宅建築費一千万円の計二千万円。その根拠は、定年後はヒマラヤトレッキングなどもしてみたかったので、そうした趣味や自己実現に、年間百万円、十年間で二千万円を自分へのご

褒美として使うことを家族も許してくれるだろうと考えた。この費用をすべて田舎暮らしに充てるのである。

田舎で十年暮らして都会に戻ると思えば、建物を減価償却し土地の値下がりも考慮しても一千万円で売れるだろう。すると十年で一千万円の田舎暮らしになる。二十年に延びれば年間五十万円で済む。それに田舎の家は、子どもたちにとっては週末の家にもなる。

今、林さんは山梨県小淵沢町で暮らしている。高原での生活費は月十万円。都会で暮らす妻の生活費もあり、それが限度。時々、お互いに往来する生活だが、別々に暮らすことで、むしろ夫婦の接点ときずなが深まったことに最近気づいたという。料理は靖子さんにメールで教えを請う。逆に役所への申請や税金面などは聞いてくる。

男が自立して生きようとする、女と同じ目線に立って物ごとを考えるようになる。共通の土俵が新しくできたのである。家族の暮らしエリアを広げること、林さんは自己実現をしたのだ。

(山梨県情報館代表)